

## 土偶形容器と黥面付土器の製作技術に関する覚書 複製品の製作を通じて

### Research Notes

#### 設楽博己

##### はじめに

弥生時代の日本列島の文化というと、西日本を中心に展開した水田稲作を主体とする農耕文化というイメージが支配的であり、それだけが当時の日本列島を代表する、進んだ文化のように思いがちである。それは、縄文時代から弥生時代への移行をモルガンの定義した野蛮、未開、文明という社会の発展段階に当てはめて進歩とみなし、古墳文化の成立を導いた弥生時代の政治史的な意義を重視するといった、一種の進化論的進歩史観、文明至上主義が作用しているからだろう。それも、弥生時代に対する一定の見方には違いない。

一歩そこから抜け出して、東アジア的な視点でみるとどうなるだろうか。日本列島の南北には、水田稲作文化を受容せず、縄文文化を継承した貝塚後期文化、続縄文文化という固有の文化が展開している。ともに人々の生活を支えたのは自然の資源であり、豊かな自然に依存していた。自然への適応という生活戦略の視点から、これらの文化を築いた人々の自然観や価値観を再評価すべきであろう。紀元前1世紀以降、弥生文化には漢帝国など中国文明の影響が顕著になる。近年では弥生文化において大陸の文化の影響を強く受けた地域の文明化の度合いを過大に評価する傾向がある。だが、中国文明と比較してみると、弥生文化との間にはさまざまな異質な点を指摘せざるを得ない。中国文明をみる眼で北部九州や畿内地方の弥生文化をみると、日本列島の中では先進的だといわれるそれも、また違ったものにみえてくるであろう。

つまり、言うまでもないことだが、文化は優劣を競うような性格のものでなく、見方によってはさまざまに扱われる相対的な性格のものである。文化は多方向からみることによって、理解が深まるであろう。国立歴史民俗博物館（以下歴博）では、1999年3月から5月まで、「新 弥生紀行－北の森から南の海へ－」と題する企画展示を行う予定である。この企画展示は、北海道、琉球列島、朝鮮半島や中国といった西日本を取り巻く地域からの視点で弥生時代をとらえ直してみようという意図のもとに計画を進めている。そうした地域の一つとして東日本の弥生文化を取りあげるが、その中に、人々の死に対する観念の由来や独自性を考えるコーナーを設けて、彼らの価値観を探ろうと考えている。

東日本の初期弥生文化には、再葬という独特な葬墓制が発達した。遺体をいったん骨にした後に再び葬る葬制を再葬というが、その際蔵骨器として縄文時代の土偶の系譜を引いた土偶形容器や、それと似た顔面装飾をもつ人面の付いた壺形土器を用いた。土偶形容器は、土偶のような形をした、

脚のない裾が開いた中空の粘土製の立像で、開口部から赤ちゃんの骨を入れた蔵骨器である。黥面付土器は、土偶形容器の顔面と類似した、入墨と思われる線刻のある人面を貼り付けた土器である。展示ではこれらを一堂に会して、西日本の人面付土器と比較する。その際、実物資料を借用させていただき計画であるが、複製品も多いに活用する予定である。

そこでこの企画展示の準備として、1997年度に山梨県八代町岡遺跡の土偶形容器2体と長野県塩尻市下境沢遺跡の黥面付土器の複製品を製作した。複製品に対する考え方もさまざまであろうが、瓜二つのものをつくるのが究極の目的の一つであろう。そのためには、綿密な観察を必要とする。本稿は、複製品製作の際の観察と、とらせていただいた実測図、CTスキャナーによる断層写真にもとづく土偶形容器及び黥面付土器の製作技法に関する覚書である。さらに、いくつかの類例との比較にもとづいて土偶形容器の起源の問題と黥面付土器との区分問題について若干の考察をおこなうとともに、博物館における複製品のあり方について感想を綴った。

## 1 山梨県岡遺跡の土偶形容器

山梨県東八代郡八代町大字岡の土偶形容器は、1954年に芋掘りの際に発見された〔野沢 1984〕。土偶形容器は大小2体がほぼ完形に復元された。他に頭部と胴上部の破片があるが、それらは同一個体かもしれないので、最低3個体存在していたことになる。体部の文様やいっしょに採集された土器(図1)からすると、弥生Ⅱ期(中期初頭)、下っても弥生Ⅲ期前半(中期前葉)であろう。完形のうち大きいほうを1、小さいほうを2、他の個体破片を一括して3としておく。

1(図2, 図版1-1)は高さ27.0cm, 最大幅は裾の部分で推定15cm。頭部の裏側と右腕, 裾部の表面の大部分から裏面左側にかけて欠失している。頭部は筒状につくられ、鉢巻きのような隆帯を斜めにめぐらせる。頭の開口部は4分の1ほどしか残っていないが、突起が付けられているようであり、左右対称に復元されている。顔面はほぼ円形につくり出され、眉と鼻を貼り付け、眼と口がえぐられる。耳は両方とも欠失しており、石膏で推定復元されている。額、眉と眼の間、口の周りから頬、顎に沈線で文様が描かれる。頸はやや長い。腕は中実である。裾は大きく安定している。背中の上部に2条の沈線が引かれ、表面の肩の部分で丸くつないでいる。胴部には2条の縦の正中線を引き、その左右に弓字状の沈線を施すが、それは裏面へと続き、同じ文様を描く。その下に1条の沈線をめぐらす。頭部の隆帯上とその上、手と肩から背中にかけて、そして最下段の沈線以下の裾部に縄文が施されるが、すべて撚りは単節LRである。頸や体部の表裏ともよく磨かれて

光沢を帯びている。赤色塗彩が、とくに沈線部分や裾下端によく残っている。裾端部は削られている。焼成はよく、栗色や部分的に黒斑をもち、遠賀川式土器に近似した調整と焼色である。

この土偶形容器でもっとも問題になるのは顔面の製作技法であろう。そこでこの点に焦点を当てて詳述し

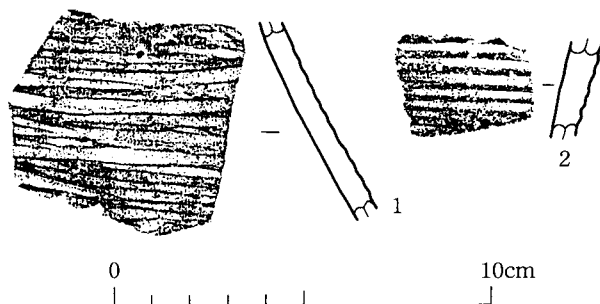


図1 山梨県岡遺跡出土土器

ておきたい。内面を観察すると、顔面の内面部分と頭部のそれとの境に段差が認められる（図版1-4）。図2の横断面は頭部を鼻のもっとも高い部分で横に切断した断面図であるが、左右にその段差が表現されている。内面の処理は、頭部の部分が指で押さえられ、顔面の部分はなでているが粗面をなす。この状態は、正面に顔面が入る部分をあらかじめ開けて頭部を製作し、その後別につくった顔面を接着させたものと予想させる。CTスキャナーによってこの部分の断層写真を撮って観察した結果、それが裏付けられた（図版2-1）。さらに、顔面を別につくって頭部と接合する際、粘土を貼り足して補強したり、面をそろえたりしていることが、断層写真の空隙や筋状の青い部分から明らかにできた。顔面の内側は成形後に粘土を貼り足すので、調整が行き届かずに粗面をなしているのであろう。こうした顔面部分の製作技法を製作技法Aとしておく。

なお、縦の断層写真で口からのどにかけて空隙が見られるが、その成因はよくわからない。胸の部分に粘土の段差があり接合箇所であることや、底部が盛り上がっていることがわかり、この写真にもとづいて実測不可能な部分の断面図を補筆した。

2（図3、図版1-2）は高さ23.0cm、最大幅は裾の部分で12.5cmを測る。表面の体下部から裾部、及び裾部上面の側面から裏面にかけてと右腕のごく一部が欠失している。頭部はまげ状に左右に張り出しており、上部に2条の沈線文を加えている。顔面はほぼ円形につくり出され、眉と鼻を貼り付け、眼と口がえぐられる。耳はなく、まげ状の部分に左右1つずつ孔が開けられている。額、眉と眼の間、口の周りから頬、顎に沈線で文様が描かれるが、モチーフは1と同じである。顎は短い。腕は中実である。裾は大きく安定している。背中の上部に3条の沈線が引かれ、表面の肩の部分で上下の線を丸くつないでいる。胴部には2条の縦の正中線を引き、それに連続して左右に弓字状の沈線を施し、さらに背面で左右の線をつないでいる。正中線下端は欠失しているが、おそらく丸くつながっており、これらの線は一筆描きできるものと思われる。胸の上には四角い杵状の刻文が描かれる。胴部下端に1条の沈線をめぐらす。背面中央に2条の沈線で渦巻き文を描き、その末端は右側面に達する。それぞれの末端は丸く閉じている。まげ状部分の上部沈線から上、開口部の口縁端部、手と肩から背中にかけて、そして裾部に縄文が施されるが、すべて撚りは単節LRである。頸の後ろがよく磨かれて光沢を帯びているが、他は若干磨滅気味である。赤色塗彩が、とくに顔面の沈線部分によく残っている。裾端部は削られている。焼成はよく、赤褐色を呈す。

頸の背面がわずかに丸く突出しているが、これは頭部を丸くつくり、その左右両側にまげ状の粘土を貼り付けた結果だと思われる。鼻のいちばん高い箇所横に切ったCTスキャナーによって、丸い頭部の左右にまげ状粘土が貼り付けられているのが明瞭にわかる（図版2-2）。さらに顔面部分も貼り付けによって製作したことが、頭部両側の亀裂から明らかであり、基本的には製作技法Aである。縦断面の断層写真によると、顔面上端付近で頭部が屈曲して立ち上がっている様子がわかる。この屈曲は、顔面上端レベルまで頭部をつくり、それより上はまげ状粘土を貼り足すことによって生じたものであろう。内面には1と同様、胸の部分とそれに対応する背面に粘土の段差がみられ、粘土紐の積み上げ痕と推測される。

今回の議論に直接関係しないが、所蔵者の野沢昌康氏の御好意で3も実測させていただいたので、この際紹介しておきたい。3のうちの一つ（図4-1）は、頭下部左側面である。頸の部分と耳の下端を残すのみである。顔面がはがれた痕跡がある。耳は高い隆帯を貼り付けてU字状をなす。U

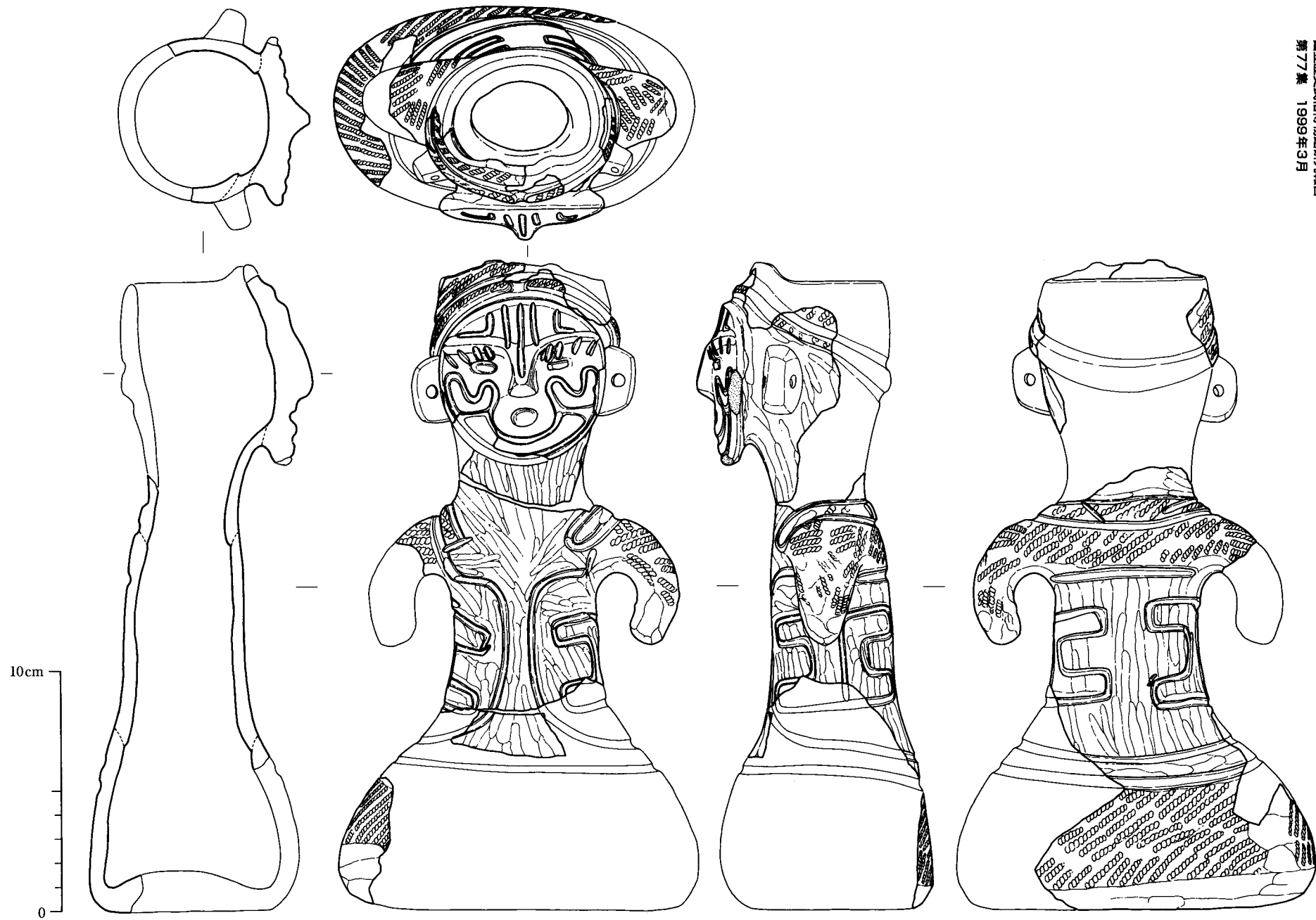


图2 山梨県岡遺跡出土土偶形容器(1)

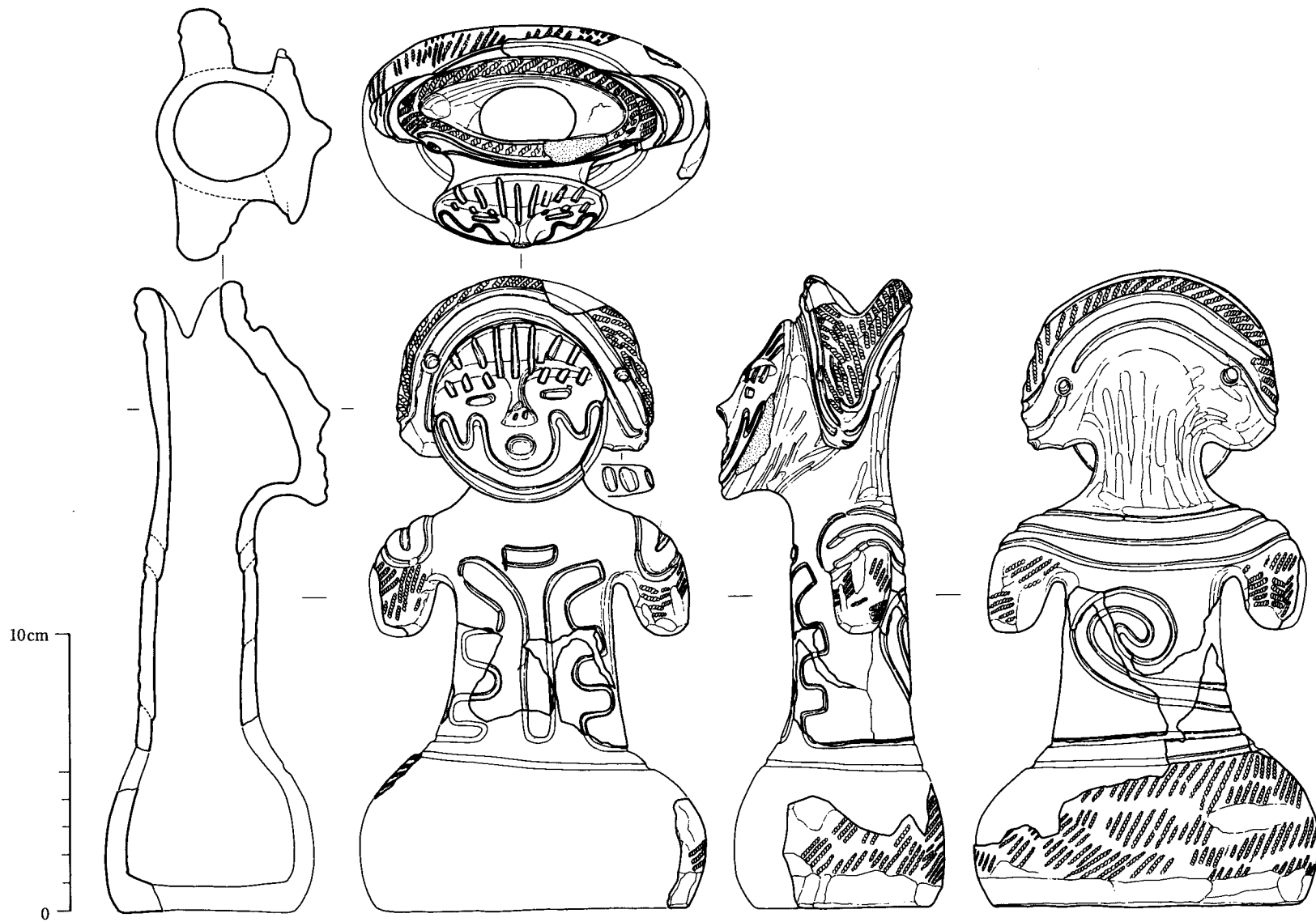


図3 山梨県岡遺跡出土土偶形容器(2)

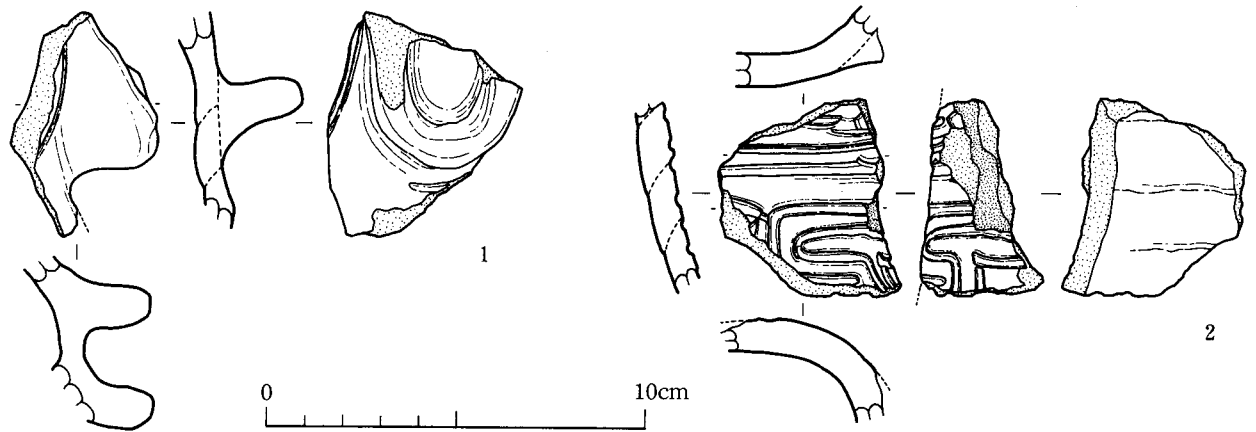


図4 山梨県岡遺跡出土土偶形容器(3)

字隆帯の背面には孔が穿たれている。頸には赤色塗彩痕が残る。オレンジ色で胎土に白色礫が目立つ。

もう一つは胴上部左側面である(図4-2)。側面上位は直線的に立ち上がるが、下半はやや裾広がりになる。背面は欠失している。横断面は隅丸長方形ないし小判形。表面上位には2本の沈線が引かれ、その上に刺突が加えられる。2本の沈線の右端は粘土貼り付けで盛り上がっており、肩や腕に移行する部分と思われる。下半には工字状の沈線文が描かれる。赤色塗彩がよく残る。器面は研磨されて光沢を帯びた部分がある。淡赤褐色、褐色で黒褐色の部分もある。胎土に白色礫をまじえる。沈線文は構図も引き方もしっかりと丁寧で、神奈川・堂山遺跡の鉢形土器に類似しており、1や2よりも若干古く前期末にさかのぼる可能性がある。

## 2 長野県下境沢遺跡の黥面付土器

長野県塩尻市下境沢の黥面付土器(図5, 図版1-3)は、1997年に発掘調査により楕円形の土坑の底から横倒しで出土した[設楽 1998]。ほぼ完形。高さ25.8cm, 最大幅は肩の部分で11.9cm。肩から底部へと、やや幅を減じつつ直線的に移行する。頭部から底部の横断面はどれも楕円形である。頭部は中膨らみの筒状につくられ、上部に鉢巻きのような隆帯をめぐらす、耳の部分でU字状に垂下される。隆帯は刻まれ、最下端の耳部に当たる部分に縦の孔が開けられる。後頭部の隆帯の下にはそれに沿って沈線がコの字形に引かれ、さらにその中にV字形や弧状の沈線が数条引かれる。顔面はほぼ円形につくり出され、鼻を貼り付け、眼と口がえぐられる。額から眉に放射状の、頬、顎に直線で横方向の沈線文が描かれる。頸は太く縮約が弱い。腕はなく、肩に沈線で縁取られた2条一対の隆帯が貼り付けられ、胸の部分でU字状に折り返し、背面は水平な隆帯になっている。隆帯上には刻み目が付けられる。胴部中央には2条の正中線が描かれ、肩の隆帯の脇から底部には弧状の沈線が2~3条垂下される。側面から背面にはL字状の沈線が数段にわたって引かれるが、左右対称でなく、左半分は斜線になっている。背面中央に円形の沈線が描かれ、それを取り巻く沈線がその斜線に連なっている。ところどころに赤色塗彩の痕が残る。黄褐色, オレンジ



図5 長野県下境沢遺跡出土顔面付土器

色、灰色で、砂質。焼成はあまく風化が進行している。出土土器は弥生前期から中期初頭のもので、中期の土器が圧倒的に多いが、顔面表現や肩の隆帯などに古い要素が窺われるので、前期末の可能性もある。

この黥面付土器の顔面の製作技法は岡遺跡例と異なる。図版1-5からも明らかなように、頭部を完全につくってから、別づくりの顔面部を貼り足している。したがって、内側は土器のようにスムーズな面をもち、岡例のような段差はない。製作技法Bとする。

### 3 土偶形容器の起源をめぐって

土偶形容器がどのように成立したのか、という点に関しては議論が深められているわけではないが、代表的な説を紹介して考察の手掛かりとしておきたい。土偶形容器が有髻土偶<sup>(3)</sup>（黥面土偶）や人面付土器（顔壺）と系譜的関連性をもつことをまず指摘したのは永峯光一氏である〔永峯 1963〕。野口義麿氏は、容器形土偶（土偶形容器）はその顔面表現と分布の近似性から、水や伊川津などの有髻土偶から発達したものであるとし、中空であることは晩期初めの遮光器土偶とも共通するが、その目的は容器であって、これまでの土偶と異なる蔵骨器などの用途に変身していった、という卓見を示した〔野口 1974〕。永峯氏も黥面土偶からの連続性を重視しているが、土偶形容器にみられる肩から胸へかけての隆帯に、大洞 A' 式土偶の指標との共通性を指摘している〔永峯 1977〕。石川日出志氏は、有髻土偶とともに土偶形容器の体部形態、腕の表現、肩の隆帯、結髪などに大洞 A' 式期前後の土偶の名残りを指摘した〔石川 1981〕。こうした研究を総括した宮下健司氏は、土偶形容器には縄文晩期終末の有髻土偶と東北地方の大洞 A' 式土偶の二つの要素が受け継がれているとするが、そのうち大洞 A' 式土偶の系譜を引いた肩から胸の隆帯は、有髻土偶が継承したものを間接的に引き継いだとしていることからわかるように、土偶形容器の直接の母体を有髻土偶に求めているようである〔宮下 1983〕。一方、石川日出志氏は中部地方の土偶形容器は有髻土偶の表現を採用しているものの、東北地方縄文晩期終末の結髪形土偶との共通点が多いことを指摘した〔石川 1987a〕。

土偶形容器の系譜に関する主な説は以上であるが、ここでは製作技法 A に注目して、土偶形容器の起源に言及してみたい。筆者はかつて「有髻土偶小考」という論文を書いたが、その中で愛知県大蚊里遺跡の土偶形容器（図6-1）に触れたことがある〔荒巻ほか 1985〕。それまでは有髻土偶として紹介されていた資料だが〔江坂 1960など〕、論文作成のために実際に観察したところ、裏面が容器の内面状を呈している（図中の a）ことと、内面上部(b)が開口部に相当すると判断して土偶形容器と考え、そうだとすればもっとも古い土偶形容器であると結論づけた。しかし、その後長野県石行遺跡の黥面土偶〔関沢 1987〕を観察したところ、この結論に疑問をもつようになった。これらの多くは別につくった顔面を頭部に貼り付けて製作しているが、接着面から剥がれたものは大蚊里例と同じような状態になっていたからである。

この問題を再び考える機会があり、1997年にもう一度大蚊里例を観察した。その結果、かつて観察した際開口部と考えた部分(b)は、粘土塊から剥がれた痕が磨滅したものと判断した。そして容器の内面状を呈していると考えた部分(a)も石行の土偶を念頭に置けば、粘土塊から剥がれた状態と言えないこともないと思えるに至り、黥面土偶か土偶形容器か判断は極めて困難だ、というのがその



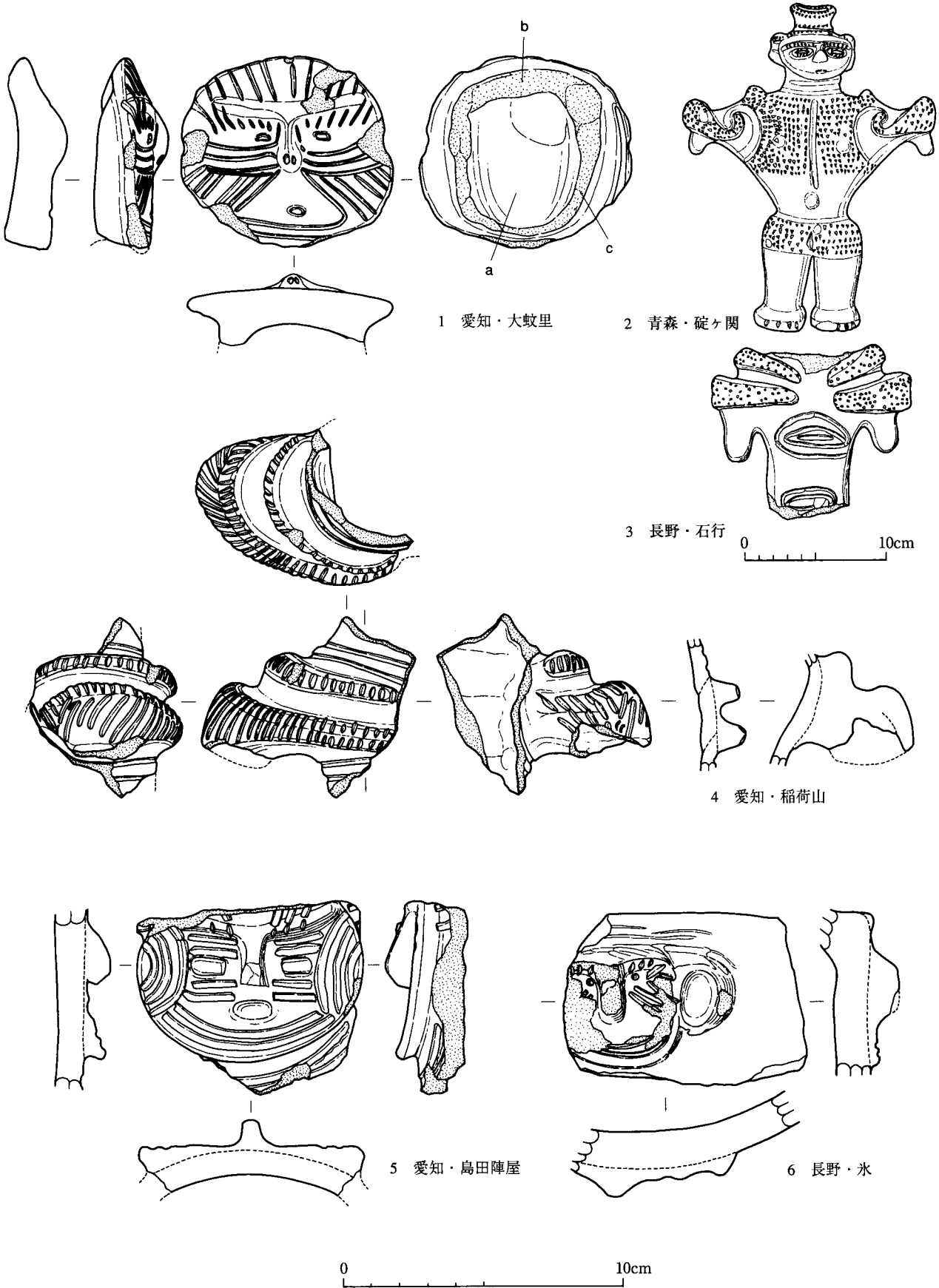


図6 土偶形容器(1)・刺突文土偶(2)・刺突文系土偶(3・4)・黥面付土器(5・6)

時下した結論だった。しかし、今回岡遺跡の土偶形容器を観察した結果、やはり大蚊里例も土偶形容器と認めるのが妥当であるとの結論に再び達した。その理由は以下の通りである。まず、岡1・2例の顔面が仮に離脱したとすると、その製作技法から内面に大蚊里例のようなU形ないしO形の剥離痕(b・c)が生じると思われる点。そうした剥離痕に囲まれた部分(a)が大蚊里例の場合粗面を呈していたが、これは岡例にも共通した製作上の特徴であり、頭部から剥がれたためと考えなくてもよいこと。さらに大蚊里例の顔面の大きさと形態、縦よりも横が長いといった特徴は黥面土偶よりも土偶形容器の顔面に近似している点などである。

大蚊里例が土偶形容器だとすると、顔面装飾の表現形態、遺跡の存続期間から、これが弥生前期中葉の檜王式期にさかのぼる可能性がある。檜王式は大洞A'式と並行する。したがって、土偶形容器は大洞A'式の刺突文土偶や結髪土偶の中空という特徴と黥面土偶の顔面を継承して成立した可能性が考えられる。愛知県稲荷山遺跡から、中空の刺突文系土偶の肩部(図6-4)<sup>(4)</sup>が出土しているのは、この問題を考えるうえで示唆的である[設楽 1999]。土偶形容器の製作技術Aは、基本的に遮光器土偶など縄文晩期～弥生前期中の中空土偶の頭部製作技術と一致しているのも見逃せない点であり、ともにこれまでの土偶形容器の出自に関する説を補強するであろう。中空で底部をもつことは、偶像である土偶の役割が蔵骨器としての容器に変化したことを意味する。

#### 4 土偶形容器と黥面付土器の区分問題

弥生時代の人面付土器は顔壺とも呼ばれる。人面付土器であれば、縄文時代にもたくさんあるので、弥生時代の壺形土器の口縁に人面が付いたものは顔壺と呼んだほうがわかりやすいかもしれない。弥生時代の人面付土器に関しては、石川日出志氏がA、Bに分類している[石川 1987b]。Aは東日本に分布する壺の口縁部に顔を立体的に表現したもので、Bは東海地方などにみられる線刻で顔を表現したものである。黒沢浩氏はこの分類をAが黥面表現の壺でBが立体的な顔面表現をとるが顔に沈線文を描かないものとした[黒沢 1997]。石川氏の分類を曲解したものと思われるが、このほうが分類としては適切なもので、基本的にこれを踏襲し、とくに人面付土器Aを黥面付土器と呼ぶ。石川氏のBは線刻人面土器あるいは黥面絵画土器としておく。

土偶形容器と黥面付土器は顔面だけが出土した場合、どこで区別するのだろうか。黒沢氏は、石川氏や筆者らの指摘[岩本 1996]を受けて頭部に顔面を貼り付けるなどの土偶のつくりと共通するのが土偶形容器で、土器の表面に顔面のパーツを貼り付けるなどしてつくるのが人面付土器だとした[黒沢 1997]。適切な区分である。つまり、本稿の製作技術AとBが土偶形容器と黥面付土器という二つの形式の区分指標として重要な点であり、製作技術の二者はそれぞれの形式の出自をも示していると考えられる。もっとも新しいと考えられる山梨県坂井遺跡の土偶形容器は製作技法Bであるが、黥面付土器の手法が影響して土偶形容器本来の手法が退化したのだろう。

土偶形容器は容器形土偶と呼ばれることもあるように、土偶との関連性が強い。それは脚こそ欠くものの、頭部や顔面を立体的につくり、腕を付けているといった土偶との外見上の近似性ばかりでなく、頭部の製作技法が晩期中空土偶と基本的に一致していることがその関連性を裏付けている。前章ではこのような視点から、土偶形容器の母体が縄文晩期終末～弥生前期の土偶であることを推測した。

一方、太い頸をもち、腕を欠き、底部の幅が肩部の最大幅とさほど変わらない下境沢例は、顔面を取り除けば瓢形の太頸壺形土器に近い。製作技法 B も、それが土器の製作技法の延長上にあることを物語るものであり、土偶形容器ではなく顔壺の仲間に加えたほうが適切なのである。しかし、楕円形の横断面、肩の隆帯、体部に描かれた沈線文など、いずれも土偶形容器に近似した特徴をもつことも指摘できるのであり、下境沢例は土偶形容器と顔壺の折衷タイプといえないこともない。下境沢例をさかのぼる時期の製作技法 B による黥面付土器が、愛知県島田陣屋遺跡と長野県氷遣跡にある（図 6-5・6）。いずれも壺形土器か否かわからないが、黥面土偶と共通した顔面をもつこれらが下境沢例とともに顔壺の起源を解く手掛かりを握っているといえよう。

いわゆる顔壺は東北地方南部から関東地方東部に分布するが、それらは眼、鼻、口、顎などの顔面のパーツを土器の口縁に貼り付けたものが一般的であり、黥面を貼り付けた下境沢例と異なる。その出自は東北地方の土偶に求められる。しかし、再葬墓分布地域で壺形土器が蔵骨器として重要性をもつにいたる点は、両者に共通した成立基盤といえよう。壺棺再葬墓や土偶形容器が成立する縄文晩期終末～弥生前期に、土偶形容器とも関連しあいながら黥面付土器が成立し、それが顔壺の成立に関わりをもった可能性を考えたいのである。

## 5 博物館における複製品とその周辺素材の役割

今回製作した複製品も含めて、博物館における複製品はこれまでいかに実物に近づけるか、という精度が主に重視されてきた。なぜ、そこまで実物に近づけようとするのか。それはケース越しの展示であっても違和感なく観覧者の観察に耐えうる目標と、研究者の研究に耐えうるという目標の二点を主に重視したものである。つまり、博物館における複製品の役割はおもに展示と研究の二つの側面に収斂されるといってよい。

歴博のような歴史系の総合博物館を新たにつくる際、また実物資料をあまり持たない博物館、資料館をつくる際、複製品はもはや展示に欠かせないものとなった。それは展示物を美術的な観賞の対象としてではなく、歴史を復元するための素材として位置づけた結果である [岡田 1984]。実物資料があってもそのテーマにふさわしくない場合にはレプリカを用いることさえあるように、歴史を再構成する際の展示物としての価値は、実物資料と複製品とでは同等に近いものがある。その時、複製品はたんなる「代替展示品としての役割をはるかに超えて、学説・概念についての情報を提供するための資料として」位置づけられることになる [国立歴史民俗博物館 1991]。こうした複製品の意義を認めて展示に多用するという歴博のとった方法は、歴史展示のひとつの実験であった。そしてその方法が全国的に普及した点で、この実験は成功を収めたものと評価できよう。

もう一点の研究用としての複製品製作においては、たとえば実測図の作成にかなうほどの資料として、そのリアリティを極限まで追究するという目標がある。複製品の製作では原品を傷めないように実物には錫箔を貼り型取りするが、たとえば縄文などは粒の中の微細な繊維の凹凸がそれによって損なわれ、素地にはうまく出てこない場合が多く、縄の撚り方が不明瞭になる場合がある。器面を磨いた際に生じた細かな稜線は、型取りすると極めて不明瞭になるのは否めない。これらは素地の段階でできる限り修正復元するとともに、彩色でカバーする。器面を調整する際のケズリによって生じた砂粒の動きは、上から下に削ったのか、その逆かを判断する決め手になる。沈線文の

切り合い関係なども観察しながら彩色しなくてはならない。素地の混和材も、型式を特徴づけることがあるので、石粒ひとつの彩色もおそろかにできない。貼り付けていた粘土粒が剥がれた痕跡と器面との境目の表現などは、彩色ひとつによってまるで実物とは違ったものになってしまい、たんなる色むらにしか見えなくなってしまう可能性もある。以上は資料の製作技術の復元という観点からは欠かすことのできないチェック事項の例であり、こうした点を見逃した複製品は、歴史資料としての価値は著しく損なわれる。複製品の製作活動には、たとえば考古遺物であれば考古学に携わる者が実測図を製作するときの観察活動と同等の、なぜこの線が、この色が、このもののこの場所にあるのか、という因果関係の把握が必要になるのである。複製品製作技術も、発注者がうるさく注文するのが功を奏してその質が目に見えて向上し、研究に耐えうる資料としての価値を有するものや、なかには実物がもつ迫力さえも備えたものもみられるようになってきた。

このように、複製品には展示と研究における実物のたんなる代用としての役割を超えた重要な意義が付託され、その役割を果たしてきた。しかし、それが一定の水準を獲得した今日では、現状に甘んじることはもはや許されない情勢になっている。歴博では1997年度に、これまでの展示活動に対して第三者による評価が行われたが、評価委員は「歴博における複製品の大幅な採用は、実物資料がなくとも広い世界を展望した展示ができるという明るい希望を全国の地域博物館に与えた。日本の歴史系博物館を実物主義の呪縛から解放する上で果たした歴博の役割、その先進性は評価されてよい。」としながらも、「しかしながら、皮肉なことに、複製品の活用が各地の博物館に波及し、「歴博方式」が拡散するに伴い、歴博の有した先進性は相対的に低下していかざるを得なかった。」との評価を下された〔国立歴史民俗博物館 1998〕。

今後、博物館の資料である複製品とその関連素材を一般入館者や多くの研究者のためにいかに活用するか、実物資料ではだせないような効果のある展示素材として、これをいかに応用していくかといった、新たな方法論的開拓が求められていくであろう。本館第1展示室の土偶のコーナーは、ボルトで固定した土偶がむき出して展示されている。触ろうと思えば触ることもできる状態だが、ケースがないぶん臨場感にあふれている。また当時の色彩を想定復元して彩色した複製品が混じっている。これは、赤色顔料の科学的分析などを専門にする永嶋正春氏の成分分析にもとづいて製作したものであり、学問的水準を損なわずに歴史資料を大胆に復元したひとつの例である。こうした展示はすでに珍しいものではないが、複製品でなくてはできない資料製作であり、展示方法である。

複製品を字義どなりに理解すれば、そのカテゴリーはあくまで実物に忠実なコピー資料ということになるだろう。したがって、上に挙げた例のような変形を加えたものは、復元複製品と呼ぶべきものである。複製品は、その展示方法においては様々な工夫を凝らす余地はあるが、複製品自体は実物のコピーなので、近似度の点で精度を求めていく以外には、せいぜい欠失した部分を想定復元するくらいしか工夫を凝らす余地はない。その点、復元複製品あるいはそれに似た種類のものに、これからの展示において活用の道がより一層多岐にわたって開けているように思える。

一例を示そう。弥生土器は朝鮮半島の青銅器時代の無文土器が北部九州の縄文土器に技術的な影響を与えて成立したことが明らかにされている〔家根 1984〕。それがどこでわかったかというと、外からは見ることのできない粘土帯の積み方である。つまり、土器の断面に現れる粘土帯の接合の傾斜が朝鮮半島の無文土器と縄文土器では異なっていて、弥生土器の多くは前者を踏襲していたか

らである。これなどは、図で示すよりも、土器を真っ二つに割ったものをつくり、並べたらわかりやすい。もう一例。弥生時代には壺形土器が重要な器として定着してくる。これは汎列島の現象である。しかし、その生い立ちや形態と使い方は地域によって様々である。関東、中部地方などでは縄文時代に用いていたような甕形土器の上半分をしぼることで壺をつくった。そのために底部付近の作り方は甕形土器のそれと共通しており、さらに煮炊きに使った壺形土器も多い。これも西日本の弥生時代の壺形土器、東日本の縄文時代の甕形土器、弥生時代の壺形土器の三つの半截品を製作して並べれば、説明のためのパネルなどはいらないほどに説得力があるだろう<sup>(5)</sup>。すでにこのような試みを行っている博物館などもあるかと思われるが、今回の展示のために製作する予定である。その際の土器はたとえ半分であっても、実物資料に限りなく近いことが要求されるし、断面も実際の土器の粘土帯積み上げ痕を十分観察したうえで模倣して製作すべきであるから、これなどは複製品と模型の中間的な展示素材といえる。研究にも十分耐えうる一方、資料の構造などをより分かりやすく理解していただく展示素材として、多角的な活用ができる可能性をもっているといえよう。

日本の博物館は禁欲的で、観ていて肩が凝り、実験的な試みが少ないということを耳にする。一方で、博物館のアミューズメント化の波がいやおうなく押し寄せようともしている。好むと好まざるとにかかわらず、その両極端の狭間に置かれた我々は、そうした問題をどう考えていくか議論しなくてはならない時が近づいてきている。アミューズメント化には直ちに賛成できないものの、複製品ひとつとっても、十数年にわたる蓄積に安住してはられない状況であることは間違いない。複製品が果たしてきた従来の役割を継承し発展させる一方で、その周辺の展示素材を含めて新たな効用を引き出す試みが、かつての歴博方式のような波及効果を求めて、博物館、資料館にたずさわる者の間で早晚始まるのではないだろうか。

## [謝 辞]

まず、複製品製作に当たり、山梨県の野沢昌康氏と、長野県平出考古博物館の小林康男氏に快諾いただき、様々な御協力をいただいた。本稿作成に当たっても、御両名に実測図作成、写真撮影につき、快諾いただいた。また、CT スキャナーによる断層撮影は、本館の機器を用いて情報資料研究部の齋藤努氏にお願いした。写真撮影は、本館資料課の勝田徹氏にお願いした。複製品に関しては、考古研究部の西谷大氏との議論が有益だった。記して感謝申し上げたい。

## 註

(1)——報文の実測図では、さらにその上に装飾がついているように推定線が描かれているが、観察の結果、口縁部が磨滅したものと考えた。

(2)——断層写真は、赤身が強いほど密度が濃いことを示している。

(3)——有髻土偶、黥面土偶とは、縄文晩期後葉から弥生時代にみられる顔に数条の類型化した沈線文を施した土偶である。筆者はかつて有髻土偶の名称を用いていた

が、現在は黥面土偶と呼んでいる。詳細は〔設楽 1999〕を参照されたい。

(4)——東北地方の刺突文土偶は、いわゆる肩パットが胸の部分で渦を巻き、それと頸の間の肩部に瘤が付けられるのが一般的である(図6-2)。本例は東北地方からの搬入品の可能性もあるかもしれないが、肩の刺突隆帯が二条施されるところからすると、中部地方で刺突文土偶の影響を受けて独自に生成した土偶(図6-3)の

---

仲間属と考えたほうがよい。しかし、そうだとするのではなかろうか。  
も中空であることはやはり刺突文土偶の影響の強さを物(5)——西谷大氏の発案による。  
語っており、土偶形容器の重要な属性の由来を示してい

---

## 引用文献

---

- 荒巻 実・設楽博己 1985「有髷土偶小考」『考古学雑誌』71巻1号 1～22頁。  
石川日出志 1987a「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究』8巻 160～164頁 雄山閣出版。  
石川日出志 1987b「人面付土器」『季刊考古学』19号 70～74頁。  
岩本 貴 1996「土製品」『角江遺跡Ⅱ』(『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第69集) 静岡県埋蔵文化財調査研究所。  
江坂輝弥 1960「土偶」126頁 校倉書房。  
岡田茂弘 1984「レプリカと博物館」『歴博』第6号 1頁。  
黒沢 浩 1997「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』416 11～16頁。  
国立歴史民俗博物館編 1991「国立歴史民俗博物館十年史」228～234頁。  
国立歴史民俗博物館編 1998「国立歴史民俗博物館第三者評価報告書—展示を中心として—」6頁。  
設楽博己 1998「下境沢遺跡出土の黥面付土器」『下境沢遺跡 片丘住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』76～81頁 長野県塩尻市教育委員会。  
設楽博己 1999「黥面の系譜」『縄文時代晩期終末期の研究』(『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』)氷遺跡発掘資料図譜刊行会。  
関沢 聡 1987「土製品」『松本市赤木山遺跡群Ⅱ—緊急発掘調査報告書—』(『松本市文化財調査報告』NO.47) 66～77頁 松本市教育委員会。  
永峯光一 1957「長野県小諸市氷発見の土製品について」『考古学雑誌』42巻2号 126～131頁。  
永峯光一 1977「呪的形象としての土偶」『日本原始美術大系』3 155～171頁 講談社。  
野口義麿 1974「土偶から埴輪へ—土偶の意義を探る3—」『古代史発掘3 土偶芸術と信仰』111～114頁 講談社。  
野沢昌康 1984「甲斐・岡遺跡出土の容器形土偶」『山梨考古』14号 31～34頁。  
宮下健司 1983「縄文土偶の終焉—容器形土偶の周辺—」『信濃』35巻8号 594～617頁。  
家根祥多 1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』49～78頁 帝塚山考古学研究所。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)





1・2 山梨県岡遺跡出土土偶形容器

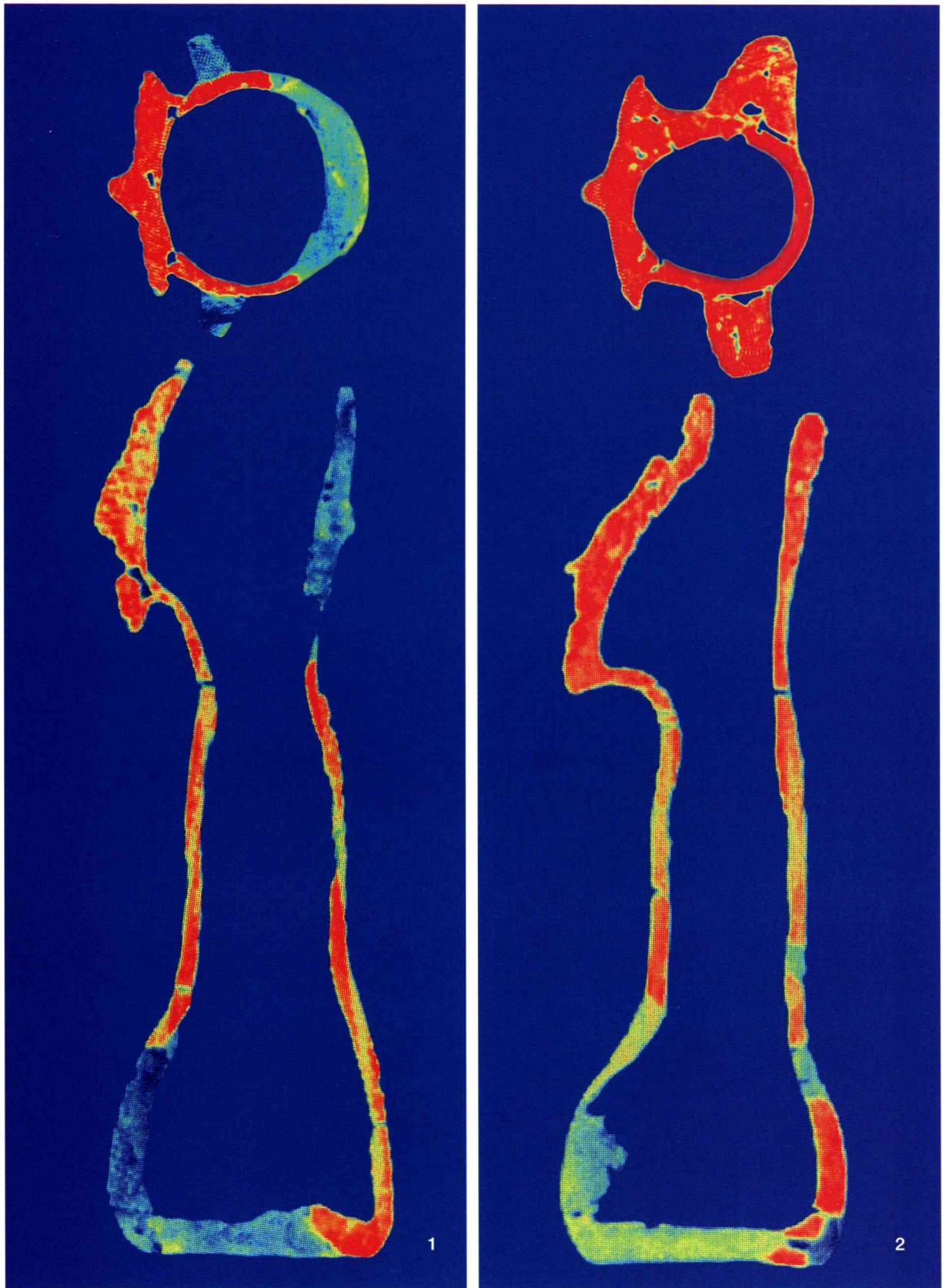


3 長野県下境沢遺跡出土黥面付土器



4・5 頭部内面（上が1,下が3）

図版1 土偶形容器と黥面付土器



図版2 山梨県岡遺跡出土土偶形容器断層写真(1は約56%, 2は約63%)